

第6回公開学術講演会を開催



岩澤康裕大学院理学系研究科教授



藤嶋昭大学院工学系研究科名誉教授

目次

広報委員会（東京大学の法人化に関するQ&A）…	2
一般ニュース ……	3
評議会(12月16日(火))承認事項・報告事項、 第6回公開学術講演会を開催、「日本野球 発祥の地」の記念碑学士会館に建立される	
部局ニュース ……	5
大学院法学政治学研究科留学生が皇居・東 京地検を見学、公開シンポジウム「死者と 生者の共同性」（人文社会系研究科・21世 紀COEプログラム「生命の文化と価値を めぐる死生学の構築」主催）開催される、 大学院農学生命科学研究科動物慰霊祭開催 される、平成15年度教育実習・介護等体験 懇談会開かれる、国際シンポジウム「量子 ドットとフォトリック結晶2003」QDPC	

2003開催、第19回バイオテクノロジー懇談
会とバイオシーズ・マッチング会の共同開
催、特別展示会「博覧会から見えるもの」
に千名が参加、東大国際シンポジウム「シ
ーボルトの21世紀」開催される

掲示板 …… 10

広報センター年末年始休館日のお知らせ、
AGS年次総会及びWSC-SD年次総会への参
加募集案内、第14回比較法政シンポジウム
「新しいグローバル化社会をめざして
(1)」、「人文社会科学の空間情報科学」国
際シンポジウム開催日の訂正、「教養学部
報」第470（12月3日）号の発行、社会情
報研究所教育部研究生募集、冬季データベ
ース定期講習会のお知らせ

計報（山田晟名誉教授、福田有広助教授）…	14
淡青評論「効率と脆弱さ」…	16

≡ 広報委員会 ≡

東京大学の法人化に関するQ & A

Q： 「国立大学法人」は、「独立行政法人」ではないのですか。

A： 「国立大学法人」は、独立行政法人通則法に規定する「独立行政法人」ではなく、国立大学法人法の規定により設立される法人です。ただし、独立行政法人通則法の規定の一部は、必要な修正等を行った上で準用されています。その意味で、「国立大学が独立行政法人化する」という表現は、正確ではありません。

Q： 本学の運営組織はどうなるのですか。

A： 運営組織は、国立大学法人法に、役員会（学長、7人以内の理事及び監事2人で構成する会議で、法人を代表し、その業務を総理する。：第11条）、学長選考会議（経営協議会及び教育研究評議会から各同数選出された者で構成する会議。：第12条）、経営協議会（学長、学長が指名する理事及び職員並びに当該法人の役員又は職員以外の者で学長が任命するもので構成する会議で、法人の経営に関する重要事項を審議する機関。：第20条）及び教育研究評議会（学長、学長が指名する理事、教育研究上の重要な組織の長並びにその他学長が指名する職員で構成する会議で、大学の教育研究に関する重要事項を審議する機関。：第21条）について定められています。

本学においては、東京大学21世紀学術経営戦略会議（UT21会議）の法人化委員会が、これら中枢組織、運営のあり方及び各規則等々について検討していますが、成案には至っていません。

Q： 国立大学法人には運営費交付金が交付されることですが、運営費交付金とはどのような仕組みですか。

A： 現在、国立大学の予算は（項）国立学校、（項）大学附属病院…というふうにより科目ごとに予算が配分され、それぞれの予算には目的や使徒が決められていることにより、原則としては、それ以外の目的に使用することができない仕組みとなっております。一方、法人化後は、国から国立大学法人に対し運営費交付金という渡し切りの交付金が交付されることになり、使徒は特定されていないため、国立大学法人が自ら予算編成を行い、それに従って弾力的に執行することが可能となります。なお、運営費交付金は会計基準によって、原則年度内に収益化することになるので、翌年度以降に繰り越すことが認められています。

Q： 法人化後は現在の国家公務員のような身分保障はなくなるとは思いますが、法人の経営方針によって解雇されることがありますか。

A： 現行の国家公務員においても失職や免職があるように、法人化後においても一定の要件のもとにおいて解雇される場合があります。この要件については「就業規則（第一次案）」において規定していますが、解雇権を濫用することは法律上も認められるものではありません。

Q： 法人化後の労働時間はどのようになりますか。

A： 法人化後の労働時間については、「就業規則（第一次案）」において現行と同様に1日8時間、1週40時間としています。また、労働基準法に基づき1日8時間の労働時間に対し45分の休憩時間を別におくこととしています。その他、現行制度では不可能であった、短時間勤務やフレックスタイム、裁量労働などの柔軟な勤務形態の設定が可能となることから、更に検討を進めているところです。

東京大学の法人化に関する質問を募集します。

多くのみなさんからの質問をお待ちしております。

募集期間 平成16年2月末日まで

応募方法 所属、氏名、質問内容、連絡先を必ず記載のうえ、電子メール又はFAXにより広報室宛にご送付ください。なお、質問の掲載については、質問者の氏名を併せて記載いたしますので、匿名希望の方は必ずその旨をご記載ください。

備考 全ての質問にお答えすることができないことも考えられます。その点は、何卒あらかじめご了承ください。

宛先 事務局総務部総務課広報室
内線：22031、82032
FAX：3816-3913
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

（広報委員会）

≡ 一般ニュース ≡

評議会（12月16日（火））承認事項

東京大学男女共同参画基本計画の策定

UT21会議の下の東京大学男女共同参画推進委員会においてとりまとめた、東京大学における男女共同参画の基本方針、基本方策等を示す「東京大学男女共同参画基本計画」及び「東京大学男女共同参画宣言」が承認された。

東京大学附置研究所・センター等問題検討委員会報告

UT21会議の下の東京大学附置研究所・センター等問題検討委員会において、本学の法人化に向けた学内の附置研究所及びセンター等の在り方等が検討され、取りまとめられた下記の報告について、承認された。

報告事項

(1) 先端科学技術研究センターの附置研究所への転換について

本件については、当初単独で附置研究所に転換することを検討してきたところであるが、先端経済工学研究センターとの統合を含めて附置研究所に転換することを了承した。

(2) 大学院情報学環と社会情報研究所の統合（社会情報研究所の廃止）について

本件については、両部局の将来構想を検討し、情報学環と社会情報研究所を統合することとし、これに伴い社会情報研究所は廃止することを了承した。

(3) センター組織の法人化後の取扱いについて

センター組織の法人化後の取扱いについては、センター組織の設置形態、運営方式及び予算配分方針等に関する検討・決定に関する体制を現行の附置研究所・センター等問題検討委員会において引き続き、検討を行うこととする。

東京大学大学院情報学環・学際情報学府の組織改正に伴う情報学環長選出方法の特例に関する規則の制定

情報学環・学際情報学府と社会情報研究所が平成16年4月1日に統合されることに伴い、平成16年4月1日から平成18年3月31日までの2年を任期とする学環長の選出に際し、社会情報研究所教授会の構成員である教授からも選出できるよう、特例をもうけること等に伴い、本規則が制定された。

附 則

- 1 この規則は、平成15年12月16日から施行する。
- 2 この規則は、平成18年3月31日限り、その効力を失う。

東京大学医学部附属病院規則の一部改正

附属病院の各部又はセンターに、特に必要があると認める場合に置かれる副部長又は副センター長の選任方法に、助教授又は講師が欠員の場合、助手をもって充てることのできるよう、所要の改正が行われた。

附 則

この規則は、平成15年12月16日から施行する。

「検見川・西千葉・柏II地区キャンパス再開発・利用計画要綱」の策定

平成15年3月18日の評議会において改訂が承認された「東京大学キャンパス計画の概要」に則り、新たに策定された「検見川・西千葉・柏II地区キャンパス再開発・利用計画要綱」が、承認された。

なお、「検見川キャンパス再開発・利用計画要綱」（平成6年7月12日評議会承認）は廃止する。

大学間学術交流協定

- ・東京大学と北京大学（中国）との間における学術交流に関する大学間協定の更新
- ・東京大学とハワイ大学（アメリカ合衆国）との間における学術交流に関する大学間協定の締結

評議会（12月16日（火））報告事項

東京大学情報ネットワークシステム運用規則を廃止する規則の制定

情報基盤センター内における他の学内共同利用の運用・管理と同様に迅速な対応を可能とするため、本運用規則は廃止することとなった。

なお、情報基盤センター学内共同利用運営委員会において、改めて情報ネットワークシステムの運用に関する規則の原案を作成し、総長決済を得ることとされた。

東京大学情報ネットワークシステム運用規則を廃止する規則

東京大学情報ネットワークシステム運用規則（平成5年10月19日東京大学規則第52号）は、廃止する。

附 則

この規則は、平成15年10月14日以降、情報基盤センターにおいて、情報ネットワークシステムの運用に関する規則の原案を作成し総長決裁を得たときに、その規則の施行の日から施行する。

大学間学術交流協定

- ・東京大学とフィレンツェ大学（イタリア）との間における学術交流に関する大学間協定の更新
- ・東京大学とブタペスト工科経済大学（ハンガリー）との間における学術交流に関する大学間協定の更新

第6回公開学術講演会を開催

「魔法の物質表目ーその不思議で魅惑の科学ー」と題した第6回東京大学公開学術講演会が、12月15日（月）18時から本郷キャンパス大講堂（安田講堂）において開催された。

講演は、本年度紫綬褒賞を受章した岩澤康裕理学系研究科教授による「触媒の原理と表面の働きー錬金術（静）から現代科学（動）へ」と、同じく本年度紫綬褒章を受章した藤嶋昭工学系研究科名誉教授による「光触媒で光クリン革命」のテーマで行われた。

高校生から中高年まで幅広い年齢層の約330名の参加者があり、各講演を熱心に聴講し、好評であった。

次回の公開学術講演会は来夏に開催する予定である。



佐々木総長による挨拶



会場の様子

「日本野球発祥の地」の記念碑学士会館に建立される

12月6日（土）、日本に初めて野球を伝えたと言われるホーレス・ウィルソン氏の野球殿堂入りを記念して、同氏が野球を伝え、試合を行った開成学校があった学士会館の敷地内において、「日本野球発祥の地」記念碑の除幕式が、佐々木総長の他、團藤学士会理事長、川島プロ野球コミッショナーなどが列席して執り行なわれた。

記念碑は、ボールを握る右手をかたどったブロンズ製で高さ2.37メートル、ボール上には世界地図が描かれ、日本とアメリカを縫い目によって結ぶことで野球の国際化などを表現したとのことで、学士会と野球体育博物館が建立した。

ウィルソン氏は1871年南校の教師として来日、その後南校が第一大学区第一番中学、開成学校、東京開成学校、東京大学と変遷した6年間、授業の傍らこの地で野球を教え、ここで野球を体験した人たちが中心となり、野球は日本全国に広まっていった。同氏は東京大学の野球のルーツであると同時に現在の繁栄する日本野球のルーツと言え、今回の表彰につながった。



記念碑ブロンズ像のモデルになった東大野球部河原前主将（社団法人学士会提供）

（学生部）

（総務部）

≡ 部局ニュース ≡

大学院法学政治学研究科留学生が皇居・東京地検を見学

11月20日（木）、大学院法学政治学研究科では、皇居と東京地方検察庁を見学する留学生見学会を実施した。留学生は、大学院と学部をあわせて72名在籍しているが、そのうち19名が参加した。訪問先で人数制限があるため定員19名を設けたが、それを上回る希望者がおり、今回は新入生を優先した。

あいにくの雨模様のなか、皇居では一般参賀が行われる宮殿東庭や有名な二重橋などを案内してもらった。皇居東御苑では、木々が美しく色づいており、留学生たちは、真っ赤な紅葉と日本庭園の美しさに感動した様子だった。



皇居東御苑にて

その後、法務省の建物に移動し、見晴らしの良い最上階のレストランで昼食をとり、第二の訪問先である東京地方検察庁に向かった。

検察の仕事についての概要説明を受けた後、証拠品保管庫、取調室、法務史料展示室を見学し、最後に検事、広報官と歓談した。留学生からの質問が多く予定時間を30分も超過してしまっていたが、どんな質問にもひとつひとつ丁寧に回答して下さった。



東京地方検察庁で説明を受ける様子

貴重な体験を通じて、参加者の日本に対する理解が一層深まり、10月入学の新入生も仲間とうち解けられ、有意義な見学会となった。

(大学院法学政治学研究科・法学部)

公開シンポジウム「死者と生者の共同性」 (人文社会系研究科・21世紀COEプログラム 「生命の文化と価値をめぐる死生学の構築」 主催) 開催される

11月28日（金）・29日（土）の両日、文学部1番大教室に内外からの講師をお招きして、公開シンポジウム「死者と生者の共同性」が開催された。

28日（金）午後は、1番大教室を満した約120名の聴衆を前に、まず稲上毅人文社会系研究科長から、最近ご母堂を亡くされた経験に言及した心に残るご挨拶をいただいた。続いて総合司会の関根清三（以下、特に断らない場合は本学大学院人文社会系研究科所属）が、かつて祖先崇拜の思想を日本人の美德としたラフカディオ・ハーンを引いて、現在の日本人の傾向と諸文明の比較を旨とする、このシンポジウムの趣旨について述べた。ヨーロッパの個人主義的傾向を批判して、和辻哲郎等が他者との共同性に注目した時、他者は空間的な生者に限られていたのに対し、このシンポジウムでは時間的な過去の他者、すなわち死者に注目するという課題が確認された。こうした趣旨に沿ってシンポジウムは、3部から構成された。

第1部は、「現代哲学は死をどう主題化してきたか」というテーマで進められた（司会・松浦純教授）。ウィーン大学のG・ペルトナー教授が、「現代の哲学的な死の理解の諸相」と題して重厚な基調講演をされた。来世や輪廻等を想定した形而上学的な死についてもはや語ることをせず、無として死を捉える傾向を指摘して、参加者に感銘を与えた。続いて関根がコメントータとして、現代のハイデッガー的な無が、西洋の伝統的な非存在や東洋の絶対無とどう関係するか、またそのニヒリズムの



シンポジウムの様子（第1部）

哲学が切り落としがちな他者問題を掘り取って、生者の記憶の中に生き続ける死者との共同性についてどう考えるかといった問題を指摘した。フロアーからも活発な質問と、それに対するペルトナー氏の丁寧な応答があり、充実した第1部となった。

明けて29日（土）は雨にもかかわらず前日とほぼ同数の聴衆が集まり、先ず総合司会の方から1部と2・3部の関係について要約がなされた後、午前中、第2部のシンポジウム「諸文明における死者と生者」へと進んだ（司会・池澤優助教授）。プリンストン大学のS・タイザー教授と、大学院総合文化研究科の宮本久雄教授が発題を担当された。タイザー教授は、スライドを多用して仏教における死の幾何学について語り、宮本教授はヘブライ的なハヤトロギアという氏固有の観点から、現代における象徴的な意味での死（例えば無権利な難民）と生（難民共同体）の間に立って祝祭的空間をいかにして創出するかについての構想を提示された。コメンテータは東洋文化研究所の関守ゲイノー助教授と塩尻和子筑波大学助教授が担当され、それぞれ修験道やイスラム思想という御専門の領域との関わりで論じられた。



シンポジウムの様子（第2部）

29日（土）午後は続いて、第3部のシンポジウム「死者と生者の現在」が開催された（司会・末本文美士教授）。パネリストは渡辺裕教授、渡辺哲夫東京医科歯科大学教授、J・フォード・アリゾナ州立大学教授であり、それぞれのコメントは菅野覚明助教授、F・ランベリ札幌大学教授、川村邦光大阪大学教授が担当された。渡辺（裕）氏は、葬送行進曲やレクイエムの演奏を流しながら、西洋音楽にみる死生観の「近代」について語られた。コメンテータからは政治との関わり等が問題とされた。渡辺（哲夫）氏は、父親を殺した統合失調症の患者の例を引いて、生者と生者の共同性という表層ではなく、生者と死者の共同性という深層にまで遡らないとカタストロフに陥るとして、精神病理学的視点から現代に警鐘を鳴らした。しかし生者と生者の共同性を表層と断ずる理由は何か等が問題とされた。最後にフォード氏は、ホロコースト・ヒロシマ以降、無意味な大量死の意味づけは、死者に近い生者の記憶において将来そのような大

量死を防ぐ手立てとする以外にないであろうという見通しについて語られた。しかしあれは大量死ではなく大量殺人というべきではないか等の疑問も出された。最後に拠点リーダーの島菌進教授が、このシンポジウムに集った全ての方々、特に発表と討論の労を取られた先生方、また準備期間から当日の運営まで献身的に働かれたCOE特任研究員たちへの謝辞を述べて、盛大な拍手の中に閉会となった。



シンポジウムの様子（第3部）

第1部で現代のニヒリズム哲学の視点から、来世といった形而上学的な死について語る語り口を放棄したらどうなるかという問題提起に始まった本シンポジウムは、第3部に至って、理不尽な死を遂げた人々を初めとする、近く遠くの死者たちを記憶し、自己の歴史的出自に思いを致す、そういう生者の死者との共同性という方向に、ニヒリズムを超越して行く1本の道を見出して、或る円環を結んだように思われた。2日間の共同の探求の一里塚をこの辺りに見出し、これを作業仮説として、またそれぞれの研究の場に持ち帰って更なる吟味を加え、ここに端緒についた共同の探求を今後もまた連携しながら深めて行くことができれば、と主催者側としては念じている。内外のパネリストの感想や、聴衆のアンケートに拠れば、そうした思いは多くの参加者に共有されたようである。

（大学院人文社会系研究科・文学部）

大学院農学生命科学研究科動物慰霊祭開催される

12月5日（金）11時から、弥生キャンパス内の動物慰霊碑前で、平成15年度動物慰霊祭が執り行われた。農学生命科学研究科では、数多くの動物が研究・実験用として供され、生命科学の発展に大きく寄与しており、附属家畜病院では治療の甲斐なく死亡する動物も少なくない。

当日は、局博一獣医学専攻長の挨拶があり、引き続きで参列者が動物の霊に思いをいたし、献花を行った。小雨模様の天候ではあったが、教職員、学生を中心に200名を超える参列者であった。



慰霊碑に献花する学生達

（大学院農学生命科学研究科・農学部）



平成15年度教育実習・介護等体験懇談会開かれる

11月21日（金）17時30分から山上会館において、2003（平成15）年度の教育実習および介護等体験が11月中旬ではほぼ終了したのを受け、教育実習校及び介護等体験関係の先生方をお招きして懇談会が開かれた。

大学側からは、総長をはじめ各学部長、教職課程委員会委員、教育学部附属中等教育学校教諭など約70名が参加して、教育実習校及び介護等体験校等の方々に対してご慰労申し上げるとともに、感謝の意を表した。

懇談会は佐々木総長の挨拶に始まり、渡部大学院教育学研究科・教育学部長の挨拶、三橋教育学部附属中等教育学校副校長による教育実習経過報告の後、稲上大学院人文社会系研究科・文学部長の発声により乾杯が行われた。

しばらく歓談の後、大学院人文社会系研究科および理学部の教育実習生2名から、教育実習を行っての感想等の報告が行われた後、教育実習校を代表して沖山お茶の水女子大学附属高等学校教諭から、教育実習についてのご意見をいただいた。



教育実習の体験報告を行う大学院人文社会系研究科学生

また、農学部および教育学部の介護等体験者2名から、介護等体験の体験談等の報告が行われ、続いて中村東京都社会福祉協議会福祉部長より、介護等体験についてのご意見をいただいた。

会は、終始なごやかな雰囲気で行われ、三浦教育学部附属中等教育学校長の閉会の挨拶をもって19時30分頃散会した。

（大学院教育学研究科・教育学部）

国際シンポジウム「量子ドットとフォトニック結晶2003」QDPC2003 開催

生産技術研究所／先端科学技術研究センター・ナノエレクトロニクス連携研究センター（NCRC）では、11月17日（月）～18日（火）の2日間にわたって、駒場キャンパス数理科学研究科において標記国際シンポジウムを開催した。本シンポジウムは文部科学省ITプログラム「光・電子デバイス技術の開発」プロジェクト支援のもと、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、（財）光産業技術振興協会（OITDA）などの共催により開催された。会場となる大講義室が満席となる300人を上回る参加者を得て、成功裏に終了した。

講演はすべて英語で行われ、初日オープニングセッションでは、来賓として文部科学省研究振興局石川明夫局長より産学官連携プロジェクトに対する文部科学省の支援と期待を込めた祝辞が述べられた。



来賓挨拶をされる文部科学省石川局長

テクニカルセッションは、海外からベルリン工科大学のBimberg教授をはじめ7人の招待講演者が参加し、それぞれ研究活動の最近の成果について報告があった。日本国内からはプロジェクト参加の大学、民間企業から、量子ドットの物理、量子ドットレーザー、増幅器、フォトニック結晶、単電子素子などの講演が2日間にわたり行われた。

2日目の後半は、一般より投稿されたポスターセッションが行われ、39件のパネルを前に多くの議論が交わされた。終了の時間が来てもブースごとになお熱心な議論が行われており、聴衆の関心の大きさを表していた。なおこのシンポジウムを引き続き開催してほしいとの声が強く、次年度以降も開催を約して閉会した。

（生産技術研究所）

第19回バイオテクノロジー懇談会とバイオシーズ・マッチング会の共同開催

分子細胞生物学研究所では、従来から、企業との情報交換・交流をはかるため、「バイオテクノロジー懇談会」（（財）応用微生物学研究奨励会後援）を行ってきたが、今年の「第19回バイオテクノロジー懇談会」は、東京都産業労働局の依頼により、バイオテクノロジーに関わる研究機関と民間企業との橋渡しの場とする「バイオシーズ・マッチング会（講演会、研究所見学交流会）」との共同開催として、11月25日（火）13時30分より弥生講堂・一条ホールで行われた。

当日は雨にもかかわらずベンチャー、大中小企業、銀行等々から百数十名の参加者があり活気に溢れた会となった。東京都産業労働局産業政策部長、分生研所長の挨拶に続いて、6人の分生研教授の講演が行われ、さらにポスター発表、所内見学、懇親会が行われた。民間企業と分生研との橋渡しの場となる有意義な会となった。

【講演会】

「膜蛋白質構造研究の最先端」

（生体超高分子研究分野教授 豊島 近）

「レチノイドとサリドマイドをリードにした創薬研究」

（生体有機化学研究分野教授 橋本祐一）

「幹細胞研究の医療への応用」

（機能形成研究分野教授 宮島 篤）

「細胞核内の情報伝達による遺伝子発現制御機構」

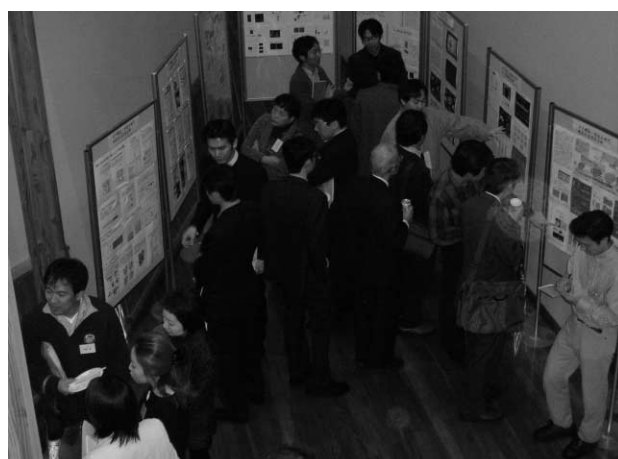
（核内情報研究分野教授 加藤茂明）

「癌化のシグナル伝達と分子標的治療」

（分子情報研究分野教授 秋山 徹）

「分子標的薬剤のトランスレショナルリサーチ」

（細胞増殖研究分野教授 鶴尾 隆）



ポスターセッション

（分子細胞生物学研究所）

特別展示会「博覧会から見えるもの」に千名が参加

附属図書館では11月12日（水）から11月26日（水）まで、万国博覧会コレクションを中心とした特別展示会「博覧会から見えるもの」を開催し、学内外から約1,000名の参加があった。今回の展示会は例年の特別展示会と同様、電子展示（<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai>）でも公開している。

会期中には「博覧会」をテーマに、本学教官5名による連続講演会も開催されたが、毎回聴講者が多く座席が足りないほどの盛況となった。質疑応答も盛んで、講演会後「有意義で面白かった」との感想が多く寄せられた。講演会の講師・演題は次のとおり。

- ・能登路雅子大学院総合文化研究科教授
「1893年シカゴ博覧会と日本」
- ・藤森照信生産技術研究所教授
「博覧会と国際建築交流—大工山添喜三郎とフランク・ロイド・ライトの場合」
- ・吉見俊哉社会情報研究所教授
「近代日本と万博幻想：植民地主義から開発主義へ」
- ・今橋映子大学院総合文化研究科助教授
「使命と旅愁のはざまに—1900年パリ万博と日本人留学生たち—」
- ・木下直之大学院人文社会系研究科助教授
「湯島聖堂博覧会と内国勧業博覧会」

また、今回の展示会をもとに、学内所蔵の博覧会関係資料目録を作成中で、附属図書館ホームページに掲載する予定である。



初めて万博を見る日本人使節団（1862年ロンドン）



連続講演会に聞き入る聴衆

（附属図書館）

東大国際シンポジウム「シーボルトの21世紀」開催される

国際共同展示「シーボルトの21世紀」展に関連する第2回目の講演会が11月28日（金）に総合研究博物館で開催され、オランダ・ライデン大学植物学博物館のP. バース館長をはじめ、国内外の研究者7名がシーボルトとシーボルトコレクションに関連した講演を行った。

講演終了後には、六本木ヒルズのスカイスタジオに会場を移し、レセプションが開催された。

講演会及びレセプションには多くの関連分野の研究者のほか、文部科学省の井上正幸科学技術・学術政策局次長や小宮山副学長、上杉事務局長ら大勢の参加があり、盛況であった。



講演を行う大場秀章・総合研究博物館教授

（総合研究博物館）

≡ 掲示板 ≡

広報センター一年末年始休館日のお知らせ

広報センターは下記のとおり休館いたします。
平成15年12月26日（金）～平成15年1月5日（月）
（1月6日（火）午前10時より開館します。）

（広報センター）

AGS年次総会及びWSC-SD年次総会への参加
募集案内

東京大学では、マサチューセッツ工科大学、スイス連邦工科大学、及びスウェーデンのチャルマーズ工科大学と共に、環境保全を図りつつ地球規模での持続的発展を求める国際学術協力、AGS（Alliance for Global Sustainability）活動を推進しております。

AGSでは毎年年次総会を実施しておりますが、平成16年のAGSの年次総会は、3月21日（日）から24日（水）にかけて、チャルマーズ工科大学で開催されます。

一方、AGSでは大学院生を中心としたWorld Student Community for Sustainable Development（WSC-SD）が一昨年に設立され、本学のStudent Community（UTSC）は中心的な役割を担い、現在も活発な活動を展開しております。大学院生、及び学部学生を対象に、AGS年次総会開催に先立って3月17日（水）から21日（日）にWSC-SD年次総会も開催されます。

AGSの活動に関心をお持ちで、AGS年次総会、WSC-SD年次総会に参加を希望する本学学生に、旅費・滞在費を東京大学AGS研究会が助成することになりました。参加希望者は、下記のホームページを参照の上、掲載されている案内に従ってお申込みください。

申し込み期限：平成16年1月10日（土）

ホームページ：

<http://ags.esc.u-tokyo.ac.jp/utsc/>（UTSCホーム）

リファレンス：

<http://www.global-sustainability.org/>（AGSホーム）

<http://www.wscsd.org/>（WSC-SDホーム）

問い合わせ先：

寺園（UTSC代表）zono@nenv.k.u-tokyo.ac.jp

内線24073

浅尾（AGSコーディネーター）asao@esc.u-tokyo.ac.jp

内線27937

（AGS事務局）

第14回比較法政シンポジウム
「新しいグローバル化社会をめざして（1）」

東京大学大学院法学政治学研究科・東京大学21世紀COEプログラム「先進国における《政策システム》の創出」共催により、下記シンポジウムを開催いたします。

平成16年1月13日（火）10:00～13:00

本郷綱ビル2F 大学院法学政治学研究科COE会議室

挨拶・司会：宮廻美明 大学院法学政治学研究科教授
10:00～11:15

「日本とイラク戦争」

報告：クリストファー・ヒューズ ウォーウィック
大学講師

コメント：菅 英輝 九州大学教授

Q & A

11:30～12:45

「リージョナリズムとトランスナショナルな市民社会－
EUの事例から－」

報告：網谷龍介 神戸大学助教授

コメント：ヒューゴ・ドブソン シェフィールド大
学講師

Q & A

12:45～13:00

まとめ：グレン・フック シェフィールド大学教
授・東京大学（大学院法学政治学研究科）
21世紀COEプログラム研究拠点形成特任
教員（教授）

高橋 進 大学院法学政治学研究科教授・
同COEプログラム拠点リーダー

使用言語：日本語・英語

（大学院法学政治学研究科・法学部）



「人文社会科学の空間情報科学」国際シンポジウム開催日の訂正

学内広報1276号にてお知らせしました「人文社会科学の空間情報科学」国際シンポジウムの日程を、下記のとおり訂正致します。

(誤)

日時： 1月29日(木) 10:00~16:30

場所： 山上会館大会議室
(日英同時通訳あり 参加費無料)

(正)

日時： 1月30日(金) 10:00~16:30

場所： 山上会館大会議室
(日英同時通訳あり 参加費無料)

問い合わせ先：

tel 03-5841-6225 atsu@ua.t.u-tokyo.ac.jp

大学院工学系研究科都市工学専攻 教授 岡部篤行

(大学院工学系研究科・工学部)

「教養学部報」第470(12月3日)号の発行
——教官による、学生のための学内新聞——

大森正之：火星を緑の星に 藍藻研究者の夢

深代千之：陸上・日本スプリント史上初のメダル獲得

加藤道夫：延命から再生へ

学際交流棟改修完成

松原隆一郎：関連社会科学シンポジウムのすすめ

〈本の棚〉

村田 滋：小島憲道・下井守編『現代物性化学の基礎
化学結合論によるアプローチ』

教養課程の化学で学んで欲しいこと

杉橋陽一：今橋映子著『〈パリ写真〉の世紀』

ベンヤミンの星の下で

山脇直司：宮本久雄・大貫隆編『一神教文明からの問
いかけ 東大駒場連続講義』

一神教を脱構築する試み

〈わたしの一押し〉

佐藤良明：Unplug yourself

——ときどき脱電、のすすめ

〈時に沿って〉

村越隆之：駒場に來ました

村田昌之：興味をもつということ

岩井智彦：わたしの履歴書

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

(大学院総合文化研究科・教養学部)



社会情報研究所教育部研究生募集

社会情報研究所では、平成16年度教育部研究生を次のとおり募集します。

研究生には、マス・コミュニケーションや社会情報についての教育指導を行います。

講義日程 毎週月曜日～金曜日

15:15～16:55

17:05～18:45

18:55～20:35

修業年限 2年

出願資格

①東京大学の2年次以上及び2年次に在学見込みの在学生または卒業生

②他大学の在学学生で①と同等の資格を持つ者または卒業生

出願期間 2月2日(月)～6日(金)

筆記試験 2月17日(火) 13:30～17:00

試験科目

英語(外国人は日本語)、基礎学力(教養課程修了程度の社会科学・人文科学の基礎知識)

面接試験

2月27日(金) 9:30～(筆記試験合格者に対して行う)

合格発表 3月1日(月) 15時

募集要項は社会情報研究所庶務掛にて1月6日(火)より配布予定

(社会情報研究所)



冬季データベース定期講習会のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、下記のとおり冬季データベース定期講習会を実施します。

データベースを利用した最新の文献調査方法に関する講習会です。パソコンを使った実習を中心に行います。どうぞお気軽にご参加ください。

●会場

総合図書館1階メディアプラザI 講習会コーナー

●時間帯

11:00～12:00、15:00～16:00、18:00～19:00

●定員 12名(先着順)

●参加方法

参加予約は不要です。

ご都合の良い時間帯を選んで、開始時間までに会場に直接お越しください。

●各コースの内容

コース名	内 容
入門コース	・授業で指定された文献や参考文献リストに記載された文献の所在調査のテクニックを習得することを目的とします。 ・OPACなど基本的なデータベースを使った検索実習を中心とします。
実践コース(1) 文献データベース	・研究に必要な文献を調査・収集するテクニックを習得することを目的とします。 ・雑誌記事索引データベースをはじめ、各専門分野の文献データベースの検索実習を中心に、文献調査方法と電子ジャーナルの利用について紹介します。
実践コース(2) 引用索引データベース (Web of Science)	・研究に必要な文献を調査・収集するテクニックを習得することを目的とします。 ・引用索引データベース (Web of Science) の検索実習を中心に、文献調査方法と電子ジャーナルの利用について紹介します。
実践コース(3) 電子ジャーナル	・東京大学で利用できる代表的な出版社の電子ジャーナルの利用方法を紹介します。 ・OPAC、FELIX、Web of Science等のデータベースを用いた文献検索の実演を行います。

new!

●スケジュール（1月～3月）

月	火	水	木	金
1/5 休館日	1/6	1/7 15:00-16:00 実践(2)	1/8	1/9 11:00-12:00 実践(3)
1/12 休日	1/13 11:00-12:00 入門	1/14	1/15 11:00-12:00 実践(1)	1/16
1/19 11:00-12:00 実践(2)	1/20	1/21 18:00-19:00 実践(3)	1/22 休館日	1/23 15:00-16:00 実践(1)
1/26	1/27 18:00-19:00 実践(2)	1/28	1/29 15:00-16:00 実践(3)	1/30
2/2 15:00-16:00 入門	2/3	2/4 11:00-12:00 実践(1)	2/5	2/6 11:00-12:00 実践(2)
2/9	2/10 11:00-12:00 実践(3)	2/11 休日	2/12 15:00-16:00 実践(1)	2/13
2/16 18:00-19:00 実践(2)	2/17	2/18 15:00-16:00 実践(3)	2/19	2/20 11:00-12:00 入門
2/23	2/24 15:00-16:00 実践(2)	2/25 休館日	2/26 休館日	2/27 18:00-19:00 実践(1)
3/1 11:00-12:00 実践(3)	3/2	3/3 15:00-16:00 実践(1)	3/4 11:00-12:00 実践(2)	3/5
3/8	3/9 15:00-16:00 実践(3)	3/10	3/11 18:00-19:00 入門	3/12
3/15 18:00-19:00 実践(1)	3/16	3/17 18:00-19:00 実践(2)	3/18	3/19 18:00-19:00 実践(3)
3/22	3/23 11:00-12:00 実践(1)	3/24	3/25 休館日	3/26 15:00-16:00 実践(2)



<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/koshukai/>

なお、情報基盤センターでは定期講習会の他、データベース出張講習会も実施しております。ご要望に応じた内容で研究室までお伺いします。授業やゼミ等でご活用ください。

希望の日時、内容等をメールでお知らせください。スケジュールを調整のうえ、折り返しご連絡します。

●申込み先 学術情報リテラシー掛（22649）
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

（情報基盤センター）

≡ 訃報 ≡

山田 晟 名誉教授

本学名誉教授 山田 晟先生は、去る10月12日に逝去されました。享年95歳でした。

先生は、昭和6年東京帝国大学法学部法律学科を卒業され、東京帝国大学大学院（法学部）在学を経て、昭和8年4月東京帝国大学助手、同10年5月助教授、昭和20年9月ドイツ法担当講座の教授に就任されました。以来、昭和43年に停年退官されるまで、35年間の永きにわたり本学において教育・研究に従事され、ドイツ法学の発展に多大の貢献をなされるとともに、多数の研究者を養成されました。

在職中、学内の行政面においては、評議員をはじめ、大学院社会科学研究科基礎法学課程主任、外国人学生委員会委員長、法学部附属外国法文献センター運営委員会委員長等を務められるなど、各種の職務に尽力される一方、学外では、法制審議会民法部会委員として民事立法にその学識を活用され、学術奨励審議会委員、最高裁判所図書館委員会委員、民事行政審議会委員、矯正審議会委員などを歴任し、さらには比較法学会理事長、日独法学会理事長としてこれらの学会の運営にも指導的役割を

果たし、もって我が国の法律学界の発展と国際的な学術交流の促進に大きく貢献されました。

先生は、ドイツ法及び法学一般の分野において研究ならびに学生の教育と後進の指導育成に尽力し、ドイツの公法及び私法、さらには法の歴史と思想の広範な領域にまで及んで専門的な研究を行う一方、我が国において唯一のドイツ法の体系的概説書を著し、さらには専門的技術的な法学の知識を平易に解説し学生の入門に資する教科書「法学」の執筆によって、教養課程の法学教育に大きく貢献されました。

先生は、本学ご退官後は、成蹊大学法学部教授、のち法学部長に就任し、成蹊大学の充実発展に尽力され、同大学を退職した後、愛知学院大学客員教授となり、同大学における法学の研究・教育の充実にも多大な寄与をされました。

ここに先生の卓越したご功績と温かいお人柄をしのびますとともに、謹んで哀悼の意を表します。

(大学院法学政治学研究科・法学部)

福田 有広 助教授

本学大学院法学政治学研究科・法学部助教授福田有広先生は、去る11月16日逝去されました。享年39歳でした。

先生は、1988年東京大学法学部を卒業された後、法学部・大学院法学政治学研究科助手、オックスフォード大学留学を経て、1993年政治思想史講座の助教授に就任され、以来、本学において精力的に研究教育にあたられました。ご在職の間、先生は図書委員会委員、学務委員会委員、緑会評議員、学習相談室運営委員会委員等を務められ、強い責任感をもって職務をこなされました。

先生は、西洋政治思想史研究者として、ハリントンやロックをはじめとする16、17世紀ヨーロッパの政治思想、さらには近代政治思想とリヴィウスとの関係について研究を進められました。代表作Sovereignty and the Sword: Harrington, Hobbes, and Mixed Government in the English Civil Wars は、国際的に高い評価を受けまし



た。

また、先生は、教育や大学、日本の政治学のあり方についても、意欲的に取り組まれました。政治学史の講義では、問題演習を設定して学生の答案を添削し、面談に応じるなど、学生との交流に多くの意を用いられました。教養学部総合科目として、本研究科教官多数の協力の下に開講された、所謂「法学部駒場演習」も、先生のイニシアティブによって実現されたものです。学外においても、日本政治学会幹事、政治思想学会幹事を歴任されるなど、将来を嘱望される存在であったことは、衆目の一致するところでありました。

あまりにも若くして先生を失いましたことは、法学政治学研究科・法学部、また日本政治学にとって、痛恨の極みであります。突然の悲報に接し、先生の輝かしい才能と温かいお人柄を偲びつつ、謹んで哀悼の意を表します。

(大学院法学政治学研究科・法学部)

「噴水」「窓」のコーナーにご意見を

「学内広報」には、みなさんから投書を寄せていただく欄として「噴水」、東京大学と社会との連携・協力情報を紹介するための欄として「窓」が設けられています。これらの欄への投書要領は次のとおりです。

「噴水」

- 1 本学における教育・研究活動等に関する意見を述べたものであること。
- 2 個人の投稿で所属・氏名を明記したものであること。
- 3 他者への非難・攻撃を含まないものであること。

「窓」

「東京大学とその周辺地域の歴史」、「学外機関より本学構成員への表彰」、「学外の方からの東京大学に関する意見」など、東京大学と社会との関係に関する情報であること。

以上の要件をそなえるものの中から、広報委員会が適当とするものを、適宜、掲載します。

送り先 東京大学事務局総務部総務課広報室
内線：22031、82032 FAX：3816-3913
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

〔訂正〕

「学内広報」No.1276（2003.12.10）において、一部誤りがありましたので、訂正して、お詫びします。

4 ページ「文部科学省永年勤続者の表彰について」

- | | | |
|----------------------|---|-------------------|
| （誤）大学院理学系研究科等事務長 | → | （正）理学系研究科等事務長 |
| （誤）大学院経済学研究科事務長 | → | （正）経済学部・経済学研究科事務長 |
| （誤）大学院工学系研究科等総務課課長補佐 | → | （正）工学系研究科等総務課課長補佐 |

効率と脆弱さ

オフィスや家庭の防犯システムの感度を上げると、侵入者を検知する能力は向上するが、同時に、小動物や風などで誤アラームが発生する可能性も高まる。肉体の限界に挑む第一線のスポーツ選手には、常にケガの不安がつきまとう。高速道路の通行量を最大にするには、すべての車が数珠つながりになり、制限速度で走りながら、トコロテンのように押し出されていくのがよい。しかし、この状態は、誰かが少しブレーキを踏むとか、坂での加速に少し違いがあったりすると破局的に進出し、ひどい渋滞に至ることが知られている。

このように、一般に効率や機能を上げていけばいくほど脆弱さが現れてくる。人工システムが複雑な構造となるのは、性能を高めたときにこの脆弱さを顕在化させない工夫の結果だ。

さて、わが国では広く構造改革が進められている。大学も来る法人化を控え、体制の見直しや内規の整備に余念のないところだ。学内では日常的に目標、計画、評価という言葉が飛び交



七徳堂鬼瓦

い、新しい大学に、新しい法人に向けて動き出そうとしている。このような改革は、どんな経緯で始められたにしろ、必ずしも悪いことではない。自らのミッションを見直し、より優れた教育研究を考える契機となるからだ。

しかし大学は公社や公団とは違う。目標、計画、評価は大事だが、教育や研究は必ずしも予定調和のように進むものではない。将来に向け一見必要のない段階を踏むことや、数字に表れないことの考慮が大切であることも多い。効率や

機能が上がることは歓迎されるべきものだが、その見返りとしてどこかで脆弱さが大きくなることを忘れるべきではない。

わたしたちは高速道路を数珠つなぎになって毎時百キロメートルで進む車になるのだろうか。得るものの代わりに失うものは何だろうか。何よりも多様性を重んじ、多様な考えを許容すべき組織、そして心優しくあるべき組織は、効率に優れ高い機能をもつ大学像とどのように並立するのだろうか。わたしたちに突きつけられた課題だろう。

(大学院工学系研究科 大橋弘忠)

(淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

◇広報室からのお知らせ

平成15年度「学内広報」の発行日及び原稿締切日を、東京大学のホームページに掲載しました。

URL: <http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/soumu/soumu/kouhou.htm>

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No 1278

2003年12月24日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/index-j.html>